

課題部門：(テーマ)微笑ましい情景

タイトル：コロナ禍で見た景色

作者：文学部日本文学科 吉田風沙

「6キロも太ってる……。」

久しぶりの体重計。それは無慈悲にも私の体の状態を正確な数字で表してくる。肥満認定されたらどうしよう。そんな思考が脳をよぎる。最近、親から女子にとって言われたくない言葉の1つ「太った？」という質問を浴びせられる。家族というのは遠慮がない。不躰だ。しかし、それは事実だ。たぶん、今の私の体は現実と同じく緊急事態宣言が発令されている。これは、ヤバい。私は痩せるために、しかたなくウォーキングをすることを決意した。

1度目の緊急事態宣言。私は自堕落な生活を送った。登校に1時間半かかるため、朝早く起きなければならなかったが、オンラインでは違う。言ってしまうと授業の1分前に起きても間に合う。最強だ。そして、1日中椅子に座って授業を受ける。終わればゲームにYouTube 三昧。歩数計をスマホに入れて分かったが、家から出ない日は1日のうちに100歩も歩いていないらしい。それでご飯を食べて寝るだけの生活をしていたら、太って当然だ。

母はもともと運動好きなこともあり、コロナ禍になって早くからウォーキングを始めていた。私もそれに加わって歩くことにした。

ウォーキングコースは私の中学の通学路。歩いて30分かかる。生き帰りで1時間のため、ちょうど良いコースだ。ワイヤレスイヤホンで音楽を流しながら自分のペースで歩いたり、走ったりしていると、程よく汗もかいて気分が良かった。

ある日の帰り道。

「あれって、もしかしてまほさんじゃない？」

母が道路の向かい側にいるママ友を見つけた。小中時代の友達のお母さんにあたるので、私も面識がある。信号を渡ってこっち側にくるようだった。よく見ると隣にはお父さんと弟の姿もあった。

「こんばんは。るな元気にしてます？」

私は友達の近況を聞いてみる。

「元気よー。今日は友達とウォーキング行ってたの。」

友達もウォーキングをしていると知って、やっぱり考えることはみんな同じだと思った。インスタを見てみると、案の定ウォーキングをしている時のストーリーがあがっていた。

友達の家族と別れてしばらく歩いていると

「こんばんは。頑張ってるねえ。」

と、鮮魚店の松本さんに声をかけられた。店が私の小中学校の通学路に位置しており、長年朝の挨拶を交わす仲だ。昔は小さい商店街のようになっていたが、今や鮮魚店しか店を開いていない。ここを通るたび、長く店を開けていることにつくづく感心してしまう。

「これ、あまりものだけど良かったら。」

そう言って渡されたのはごぼうの天ぷら。

「え、そんな。ありがとうございます。」

想像していなかったことにたじろぐ。鮮魚店だが、他にも色々と売っているようだ。渡されたごぼうの天ぷらを見ていると、自分の住んでいるところがとても田舎っぽく思えてきて、思わず笑いが出た。

その日は偶然にしてはかなり濃い 1 日だった。いつもはただ歩くだけで、こんなに話しかけられることはない。不思議なこともあるものだ。

1 回目の緊急事態宣言は全ての学校が対象だったが、2 回目は大学生だけが自粛対象になっている。私はこのように時間に余裕ができたが、小学生の弟は学校がある。しかし、弟の習っているソフトボールは休止していた。そんな弟のことを少し不憫に思って、休日は近くのローソンに一緒に行ってよくお菓子を買ってあげていた。私のウォーキングもかねて、だ。

「なぎちゃん、弟にたかられとるじゃん。」

近所の松葉さんが笑いながら話しかけてくる。猫をたくさん飼っていることから、昔は「猫のおばちゃん」と呼んでいたが、恥ずかしくなって、今はその呼び方はしなくなった。けれど、心の中ではそう呼んでいる。

「たまには姉らしいことしなきゃって思いまして。」

姉っぽく振る舞ってみせる。猫のおばちゃんの足元をうろつくオレンジのトラ猫は、「ほんとかよ」というようなジト目で見つめてくる。猫は騙せないのかもしれない。

オンライン授業になって友達とは会えなくなったが、代わりに近所の人とよく会って話すようになった。田舎だからだろうか。可能な範囲で家から出るようになったことも大きいと思う。しかし、灯台下暗し。いつも 1 時間半もかかる大学のことばかりで足元、もとい地域のことが見えていなかったように思う。私はこの暖かい田舎町が好きだ。

2 回目オンライン授業は前回の半分である 1 か月程度で終わりを告げた。コロナ禍で大学に行けず、友達とも会えない生活になってしまったが、私は新しい生活を手に入れた。何事も考え方だと思う。前回と違い、オンライン生活を満喫した気がした。大学に行けない、友達に会えないと嘆くより、ならばこれをしてみよう、始めてみようとして新しいことを模索する方が、人生楽しく過ごせると思う。

結果的に元の体重には戻せなかったが、充実した生活を送れたので私は満足だ。